



尾台 和雄さん

(上宿)

住民を蚊帳の外に置いた村議会

明治三二年四月一日、今までの戸長に替わって村長・助役・収入役が置かれ、新生「御代田村」が発足した。

当時、村の人口は一四五六人中の一定金額以上納税者一五二人が八人の村会議員を選び、村会議員が村長を選任し、村長が助役・収入役を指名し、村長自らが議長となった。

御代田村は明治三二年から大正六年までの二八年間に、村長や代理村長・職務掌人が三人替わっている。このうち御代田村以外の村長や代理村長・職務掌人が一四人、村内が九人

満期四年間務めた村長が二人、三九日の短期間の代理村長もいた。村内村長の一人平均在任期間は四八五日、村外の村長や代理村長平均在任期間は六五二日、村に理事者がいない空白期間が六五二日である。役場吏員総辞職の時もあった。

このように幾人かの村長が短期間で辞任したり、推薦を辞退して村長や助役が空席になり、郡参事会から他町村出身の村長・代理村長・職務掌人が送り込まれる村を難治村といった。御代田村は二七年間難治村が続いた。

村に多くの実力者がいるのに、他町村から村のトップを迎えたのか。当時の「信濃佐久新聞」は次のように伝えている。「…御代田村の内紛は有力議員の複雑な内部事情や感情の対立が和合しないのが要因である…」とある。

明治三七年から大正一一年間の町村成績を郡長が一項目ごとに評価し、総合点として甲・乙・丙・丁の四段階で評価している。こ

れによると御代田村は一番悪い丁が二三、丙が六、甲・乙はゼロになっている。大正二〇年、「信濃佐久新聞」によると御代田村は納税率が低く、四割五分で外の二村と共に悪村と書かれている。

私たち人間の生き方などは父母や祖父母の作り上げてきたものが主流となつて引き継がれている。

人間の根底にある本質的な物の考え方は、いつの世になつても余り変わりがない。

今の世の中は余りにも複雑で変化に富み、毎日の生活が忙しすぎ、生きる方向を見失いがちである。「歴史は繰り返す」ということばがある。

しっかりと国・県・町議会の動きを見守りたいものである。

(上宿区誌 尾台和雄著
より抜粋)



昨年、関係各位の皆さまより、しゃくなげなど寄贈して頂き、浅間しゃくなげ公園が完成を致しました。

この春、観光協会の主催により、第1回のしゃくなげ祭りが5月初めに行われました。しゃくなげの花は4月下旬の雪や霜のため、つぼみや花が凍ってしまい満開といきませんでした、町商工会の皆様はじめ各種団体のご協力により大いに盛り上がりました。

また近隣の市町村からは、ご当地キャラクターの応援も来て子ども達も大いに楽しむことができました。初めての試みでしたので何回も会議をし、花が身頃になるのか？ 雨だったかどうか？ お客さんが少なく食材が多く残ったか？ 本當



しゃくなげ公園まつり